

## 希少魚に対する乱獲の厳しい実態を国内で初めて報告

(公財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団は、宮城県の農業ため池で保護されていたゼニタナゴが採集者によって乱獲され、短期間で十数分の1に大きく減少したことを報告しました。乱獲は、絶滅危惧種の減少要因の一つだと長年考えられてきましたが、淡水魚類でその実態を評価した研究はこれまで一つもありませんでした。この研究結果は、採集者による乱獲を防ぐ法制度等の整備と、希少魚保全活動の推進の2つの重要性を示しています。この成果は日本魚類学会発行の魚類学雑誌で2022年12月26日に公開されました。

[https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jji/advpub/0/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jji/advpub/0/_contents/-char/ja)

ゼニタナゴは絶滅危惧ⅠA類に指定されている希少な淡水魚です。東日本に広く生息していた固有種ですが、開発や水質汚濁、ブラックバスの食害などによって、現在では東北地方の約10か所に生息地が局限されています。そのため、各生息地で保全団体による保護活動が長年行われてきました。ところがあるゼニタナゴの保護池の情報が採集者の間で広まり、2021年以降、多くの採集者が訪れる状況になりました。2021年の7月から10月にかけてモニタリングしたところ、1日に確認されるゼニタナゴの個体数は、わずか4カ月間で15分の1に減少しました。この間に訪れていた採集者は50名から100名と見積もられ、関東ナンバーの車も頻繁にきていました。コンタクトを取ったある採集者は約40尾を捕獲していましたので、単純計算で数千尾のゼニタナゴが捕獲されていたと考えられました。加えて、ワゴン車に300Lのローリータンクを載せ多数の採集用具を使っていたグループも来ており、個人的な愛好家だけでなく、採集業者による捕獲行われて考えられました。

現在確認されているゼニタナゴの生息地は少ない上に、タナゴ釣りや飼育が近年ブームとなっています。そのため、限られた生息地に採集者が集まり、乱獲がエスカレートしやすい状況となっています。加えてインターネットを通じた情報交換や、販売サイトも活発になっており、希少淡水魚に対する乱獲の問題はますます深刻化していると言えます。

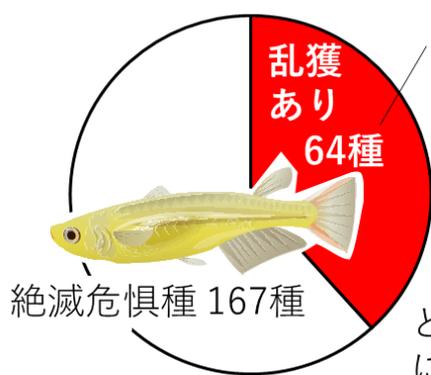
現在、環境省では希少種の採集を禁止する「種の保存法」について、その対象生物種を拡大しています(ゼニタナゴは未指定)。このような法整備は、希少種保護にとって今後ますます重要になるでしょう。その一方で、生息地が減少し続けるのを放置するのではなく、回復していく努力も重要です。現在、伊豆沼・内沼ではブラックバス駆除により、ゼニタナゴが復活しつつあります。伊豆沼全域でかつてのようにゼニタナゴが回復すれば、愛好家が採集などを楽しんでも影響はほとんどないでしょう。そのような、希少魚が安定的に生息し、私たちが楽しめる水辺を取り戻す努力もまた重要だと考えています。

論文表題 *ゼニタナゴ* *Acheilognathus typus* 再導入個体群の急激な減少: 愛好家等の採集圧による可能性

著者 藤本泰文・福田亘佑

掲載誌 魚類学雑誌 J-STAGE 早期公開版(2022)

掲載ページ [https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jji/advpub/0/\\_contents/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jji/advpub/0/_contents/-char/ja)



絶滅危惧種の40%で乱獲が問題視されてきた。



ところが、乱獲の影響を具体的に調査した研究は1例もなかった（漁業対象種を除く）。

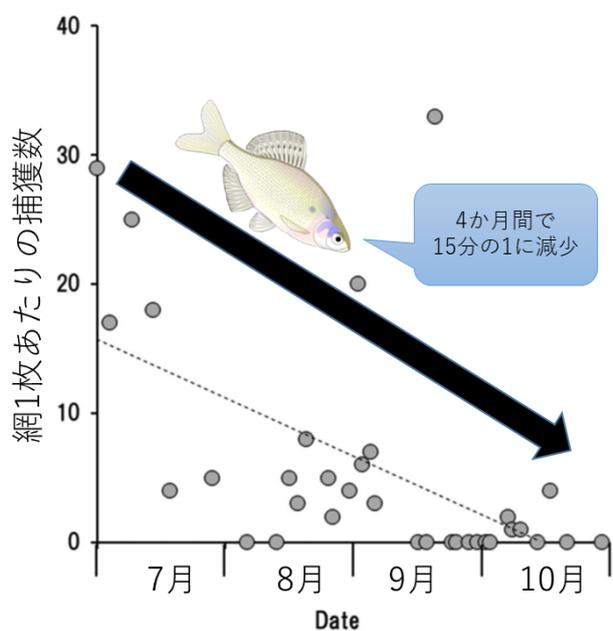


図1 2021年のゼニタナゴの調査結果. 7月から10月にかけて捕獲個体数が約15分の1に減少した.



図2 2020年と2021年の秋のゼニタナゴの体サイズの比較. 2021年には大型化していた. 乱獲により密度が低下したことで成長が進んだことを示す.

## 本件の問い合わせ先

(公財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団

藤本泰文

〒989-5504 宮城県栗原市若柳字上畑岡敷味 17-2

Tel: 0228-33-2216